市民病院発

ほのか診察室

問 市民病院　総務課　TEL 23-7852

シリーズ第50話

夏に多い皮膚病「とびひ」について

市民病院
皮膚科部長　濱松　徹

「とびひ」というのは一般的な名称で、主に黄色ブドウ球菌などの細菌の感染によって起こる伝染性膿痂疹という皮膚病です。あせも、虫刺され、湿疹などの引っかき傷から細菌が入りとびひになります。とびひにかかると水疱（水ぶくれ）ができ、この水疱が破れてでた膿が皮膚に付いて、どんどん広がっていくようすが火事の「飛び火」に例えられることから「とびひ」と言われています。

とびひには2種類あります。水疱ができる水疱性膿痂疹と、炎症が強く、かさぶたができる痂皮性膿痂疹があります。水疱性膿痂疹は夏に多く、大人より子どもに多く発症します。虫刺されなどの引っかき傷や小さい傷に、黄色ブドウ球菌などが感染して水疱ができます。水疱はすぐに破れて、ただれて広がっていきます。痂皮性膿痂疹は季節に関係なく発症し、大人に多く、免疫力が低下している時に感染すると、すぐに広がってしまいます。アトピー性皮膚炎の方にできやすい傾向があります。痛みが強く、熱が出る場合もあります。

夏は特に子どもがとびひにかかりやすいので、注意しましょう。とびひは非常に感染力が強いため、とびひの子どもが遊んでいてほかの子どもと皮膚が接触した時に、皮膚にかき傷があると菌が付着し、うつる場合があります。また、プールで感染することもあります。

お子さんにケガやかき傷がある場合は、とびひにかかっている可能性もありますので、プールに入ることで感染させないようにしましょう。

とびひを予防するには、汗をかいたらシャワーを浴びて皮膚を清潔にすることが大切です。あせもや虫刺されをかきむしることで、角質層が破壊され細菌の温床となります。とびひは比較的皮膚の浅いところに菌が付着しますので、皮膚を傷つけないためにも、爪を短く切りましょう。かゆみはなかなか我慢できませんが、かきむしらないことが予防につながります。

治療としては、抗生物質の軟膏を塗り、ガーゼで覆って感染を防ぐようにするとよいでしょう。なるべく乾燥させた方がよいので、傷用の絆創膏を貼ることはあまりよくありません。症状が緩和されない場合は、抗生剤の内服薬が投与されます。また、かゆみがひどい場合は、かゆみ止めの内服薬もあります。完治するまで根気よく治療することが大切です。

水ぶくれやかさぶたができていませんか？悪化したり、周りの方にうつさないためにも、とびひかな？と思ったら、すぐに病院で治療を受けましょう。